

「膝をかがめて祈ります」

エペソ人への手紙 3 : 14 - 19

February.5.2023

エペソ人への手紙 3 : 14 - 19 (パウロ)

Preface

今読みましたエペソ 3 : 14 - 19 の内容は、使徒パウロの祈りです。

エペソ人への手紙の受け取り手である 2000 年前のエペソ教会の信徒たちのためだけでなく、時代を貫いて現代の私たちに至るまでキリストを信じるすべての人にそっくりそのまま当てはまる祈りです。

祈りの内容すべてが私たちに必要不可欠で、キリスト教信仰とは何ぞやという本質を突くような祈りであり、キリストを信じるということの底知れなさ・奥行きを追求するような祈りです。

思い出される方もいらっしゃると思いますが、エペソ書のパウロの祈りと言いますと、私たちがもうすでに見てきました 1 章におけるパウロの祈りがありました。

1 章でのパウロの祈りも、正にキリスト教信仰の核心を突くような祈りでした。

その 1 章の祈りの内容と今日の聖書箇所である 3 章の祈りの内容は、言葉や表現は違いますが、その内容をよく見比べ合わせて見ますと、言わんとしていること、祈ろうとしていることは全くもって同じだということが見えてきます。

ではなぜ、パウロは 1 章で祈った内容をまた改めて、言葉を変えながら祈ったのか？ 祈らなければならなかったのか？

その理由を考えますといくつか考えられます。

Part One

まず一つ目の理由は、ただ単純に祈りたかったからです。

内なる聖霊によって感動を頂き、手紙の読み手のために祈らずにはいられなくなったから祈った。

私たちにも、この人たちのために、あの人たちのために祈りたい祈らずにはいられないという思いが与えられる時があります。

そういう思いが、今まさにエペソ人宛てに手紙を書いている最中のパウロに与えられたということです。

二つ目の理由として考えられるのは、エペソ書全体の前半部分にあたる 1 : 1 から 3 : 13 まで語ってきた内容に一区切りつけて、4 : 1 から新たな話を展開していく上で、ここまでの話の内容を一度祈りをもって閉じ、また祈りをもって新たに始めようとしている橋渡しの役割をも担っている祈りだということだ

す。

実際に、1:1から3:13までの内容は、キリスト教信仰とは何なのか？ 神が人にお与えくださった祝福とは何なのか？ 人間とはどういう存在で、またどういう存在へと変えられるのか？ 神がもう既に成して下さった重大な事柄と、今現在進行形で成しておられ、将来神の時にその成しておられることが完成する奥義とは何なのか？ というようなキリストの教えのその豊かな内容主旨について語ってきました。

そして4章からは、キリスト教信仰の持つその豊かな内容を知った者としての実践について、つまり、信仰を与えられた者として具体的にどのように生きていくのか？ 日々の暮らしの中に信仰者であるという豊かさをどのように表していくのか？ キリストのからだであり、教会であることが、私たちの人間関係においてどう表現されて行くべきなのか？ というような信仰の実践について語り始めていきます。

即ち、エペソ書3:14-19、または21節までの祈りは、語っている話の内容を変えるにあたって、なおいっそう主なる神の豊かなご臨在と主権を求めたいという思いが、祈りとして表れているということです。

そして三つ目の理由として考えられるのが、この祈りの内容そのものにある通りです。

ここまでパウロが語ってきたキリストにあって与えられている限りない豊かな恵みを、エペソ教会の信徒たちばかりか、時代を貫いて現代に至るまでの私たちを含めたすべてのキリスト者たちが、さらに前進して（その恵みを）まともに知ることが出来るようにという期待と望みをかけて祈っただろうということです。

逆に言いますと、キリスト者たちが、キリスト・イエスにあって与えられている限りない豊かな恵みをまともに理解出来ていないように見えた、思えたから、祈らずにはいられなかったということです。

こう言いますと、何だかとても否定的に聞こえてしまうかもしれませんが、決して否定的な思いだったり、非難するような思いで祈ったのではなく、それほどにキリストにあって私たちに与えられている限りない恵みは、底知れないものであり、測りがたいものであり、知っても知っても決して尽きることのない恵みが溢れ出て来る、滲み出て来るものだということです。

だから、その底知れない祝福を共に、さらに深く知っていくことが出来るように祈らずにはいられなかったということです。

では、私たちはどれほどに、これほどにパウロが語り祈ってきたキリストにある限りない豊かな恵みを理解出来ているだろうか、知ることが出来ているだろう

うかと考えさせられるわけです。

Part Two

福音書を見ますと、イエス様が話された沢山の例え話が記録されていますが、その例え話の中に、とてもとても返し切ることなんか出来ない不可能と言っていい程の膨大な額の借金を抱えた人が、貸主である王のところに連れて来られた話があります。

その借金の額は一万タラント、日当1万円で計算しますと、日本円で6000億円にも上りました。

ちょっと調べてみますと、世界中に、1年の国家予算が6000億円以下という国々が少なくありませんでした。

それほどに6000億という額は相当な額ですが、1万タラントという額は、私たちが6000億という額に抱く感覚よりも、当時のユダヤ人たちにはさらに大きい額のように感じる気の遠くなるような天文学的な額だったと思われます。

そんな多額の借金をした家来が当然のことながら返すことなんか出来ないと分かっていた王様は、最大限の努力を見せるようにと、自分自身や妻子まで含めすべての持ち物を売り払って返済するよう命じました。

ところが、この借金をした家来が王の前にひれ伏しながら懇願する姿を見ると、王様はこの男が可哀そうに思えてあり得ない情状酌量を施し、借金をすべてチャラにしてあげました。

すると喜び勇んでこの男は帰路に就くわけですが、その道すがら、今度は自分に100デナリ100万円程の借金をしている仲間の一人に出会いました。

今しがたあり得ないほどの額の借金を、あり得ないほどの情状酌量で免除して頂くという恵みに与ったわけですから、しかも仲間の一人ですから、(まあ、100万円という額も決して小さな額ではないですし、これからの生活を考えれば手にしておきたい額面かもしれませんが)、当然、6000億円もの額を免除してもらった喜びを少しでもその借金している仲間にお裾分けして上げて、借金をチャラにしてあげるだろうと誰もが思ったわけですが、ところがどっこい、首根っこを掴み、「耳をそろえて今すぐに返しやがれ！」と凄んで見せ、その人が返せないのを知ると、その人を引っ張って行って、牢屋にぶち込んでしまいました。

皆さんはいかがでしょう。

私なんかは、ちょっと6000億円と100万ではピンと来ないところがあるのですが、1000万円と10円ならば理解できます。

つまり、今しがた1000万円の借金を、普通では有り得ない物凄いご厚意で免除してもらったのに、たかだか10円を返さないと、恩知らずな不義理を働い

ているようなものですね。

今、この例え話に出てくる恩知らずで不義理を働いている男の根本的な問題は、理解して当然のことをまともに理解することが出来ていない、まともに把握出来て当然のことをまともに把握出来ていないということです。

つまり、6000億円もの価値を100万円程度にも理解出来ていない、1000万円の価値を10円程度にも把握することが出来ていないということです。彼には、1000万円の価値も、6000億円の価値も良く分からないんです。

お金となりますと、私たちの生活に直結してくるものなので、誰もがお金に対しては敏感です。

6000億円もの大金を100万円程度にもその価値を見い出すことが出来ない、1000万円もの大金を10円程度の価値にも見出すことが出来ないなんて話は、「そんな馬鹿な！」と当然のように馬鹿げた話のように思えてしまいますが、

これが霊的問題、つまり、神が私たちに与えることの出来る天上のすべての祝福、世界の基が置かれる前からキリストにあって私たちを選び、背きの罪を赦し、神の御前に傷のない御自分の子にしようという神様が私たちに施して下さったありったけの恵みという事柄においては、1000万円ものを10円程度の価値にも見出せていないような素振りを、生き方をしているのではないかと、鋭利にイエス様をご指摘下さっているわけです。

どういう脈絡で、この例え話をイエス様がしているのかを見てみましょう。

マタイの福音書18：21－35（パワポ）

先程も言いましたように、私たち誰もがお金の話には敏感ですので、イエス様はここで、霊的な問題をお金の話に例えて話されました。

霊的問題とは、王であられる神に、生まれながら御怒りを受けるべき子らでしかなかった罪を赦されたにもかかわらず、その罪赦されたといふとんでもないすべての最上の霊的祝福が全くもって他者との関係に反映されていないということです。

霊的という言葉を用いますと、変におどろおどろしく感じたり、何だかこう感触を掴めないふわふわしてしまうようなところがありますが、聖書で言う霊的の意味するところは、「関係」です。

神との関係、そして、他者との関係のことを、聖書では「霊的」と言います。

霊的祝福を実に享受できているのか、出来ていないのかは、いつも他者との関係に表れてきます。または、神との関係に表れてきます。

どんなに「私は神を愛している、キリストに愛されている、キリストを信じて

いる、私は喜んでいる、私は満たされている、私はやっている」と言ったところで、他者との関係にそれが反映されていないならば、または神との関係に反映されていないならば、1000万円に10円程の価値も見出せていないちょっと普通では有り得ないぐらいの霊的無知、霊的鈍感、霊的問題にあるということを教えてください。

1000万円の価値を10円程度の価値にも見出すことが出来ていない霊的盲目であるにもかかわらず、それらしい顔をして、いや、本当に自分は他者よりも優れていると本気で思っている私と皆さんの厚顔無恥な姿を、イエス様はとてとても分かりやすく、且つ的確に指摘して下さいます。

Part Three

この例え話に似たようなことを描いているもう一つの有名な例え話が、ルカの福音書にあるあの有名な放蕩息子の例え話です。

私たち、放蕩息子と言われる弟の話はよく知っていますが、意外に知られていないと言いましょか、あまり注目されることなく見過ごされがちな、もう一人の主人公である登場人物が放蕩息子の兄の存在です。

愛情あふれる父に向かって、「死んじまえ！」と言い放ったことと同じようなことをしでかし、分け与えられた莫大な財産を湯水のように使い果たして、ボロボロの姿で帰ってきた弟を丁重に迎えた父に対して、「なんて不公平な親父なんだ！」と、影ながら怒り心頭に発していたのが兄でした。

そんな兄息子に父が語り掛けた言葉が、これです。

ルカの福音書15：31（パワポ）

「私のものは全部お前のものだ。」 とんでもない言葉です。

無様な姿で戻ってきた弟に怒り、その弟に子牛一頭捌いて食べさせている父のことが何とも言えず癪に障り、静かに激憤していた兄は、「私のものは全部お前のものだ」というとんでもない祝福と恵みをすでに手にしているという事実を、たかだか子牛一頭の価格にもその価値を見出すことが出来ていなかったということです。

ここ最近の日本では、子牛一頭の値段が大暴落していて、子牛一頭1,100円の値段しか付かなくて酪農家の方々が大変な思いをされているということを聞きましたが（これはこれで大変な問題ですので、私たち神のあわれみを祈っていく必要がありますが）、「私のものは全部お前のものだ」と父から語り掛けられた兄は、その膨大な財産を1,100円程度の価値にも見出すことが出来なかったという霊的浅はかさ、霊的愚鈍さを露呈してしまいました。

アメリカの教会に行っていた時、礼拝の中でよく出て来て、「ああ、とてもいい言葉だなあ」と思った言葉が、generosity という言葉でした。

寛大とか、寛容、気前の良いという意味の言葉です。

つまり、「私たちの信じる神様は generosity な方だと、寛大で、寛容で、気前の良いお方だ」と、そして、「私たちはそのお方を信じる者としてどうですか？」と、「寛大ですか？ 寛容ですか？ 気前がいいですか？」と問うんです。

Part Four

今見てきましたイエス様の二つの例え話の内容は、お金の話ではありません。キリストにあつて私たちに与えられた限りない豊かな恵みという霊的視点、霊的洞察力、霊的祝福の話です。

その霊的視点、霊的洞察力、霊的祝福が、どこにどのように具体的に表れるのか？

関係に表れると言うんですね。

さらに、私たちの生き方、考え方、姿勢にも、それは表れてきます。

例えば、今日一日食べ物なくてひもじい思いをしますと、ともすると、「何なんだ、このひもじい思いは！ 永遠のいのちとやらが、このひもじさの中にあつて何の役に立つんだ！ 今、私が欲しいのは、永遠のいのちとか言う腹を満たすことも出来ないものではなく、350円のたった一つののり弁だ！ そののり弁の方が、永遠のいのちよりもよっぽどマシだ！」と言っているのと同じようなことを、私たちは訴え、わめき、泣き叫び、うろたえてしまいます。

与えられた永遠のいのちの価値を、あたかも350円ののり弁程度にも分かっていないような素振り、姿勢、生き方を知って知らずかしてしまうわけです。

世界が始まって此の方、あとにも先にもない、ただ唯一の神の救いのわざを肉眼で見、肌で感じ、味覚でも感じ、嗅覚、聴覚、ありとあらゆる認知機能をもって体験した全イスラエルの民たち200万人の内、たった4人、モーセとアロンとヨシュアとカレブを除いて皆が、神が下さった限りなく豊かなものよりも350円ののり弁の方がよっぽどマシだというようなことを言って、皆が皆、荒野で滅びてしまいました。

神様のせいではありません。

計り知れない限りなく豊かな恵みを頂いたということよりも、小さな小さな私の欲望を、大きな大きなものだと正当化して自分の内で勝たせてしまった結果、自ら招いた結末です。

自分の思い通りに事が運ばず、自分の思う通りに人が動いてくれず、自分の趣向や考えが他者に理解されず、または、自分が批判的になると、「何なんですか、この状況は！ 私は神の子とされたんじゃないんですか！ 祈ったら答えて下さるんじゃないんですか？ 何で祈ったのに癒されないんですか？ 何でこ

んなつらい目に苦しい目に合うんですか？ クリスマンって何なんですか？ 投獄され、鞭打たれ、下手すると首までちょん切られてしまっただけで終わってしまうような人生って何なんですか？ そんなんなら、神の国なんかもういいですし、罪赦されることなんか何の意味も無いですし、神の前に聖なる傷のない者にしようというようなことも良く分かりません。

今の目の前にある試験に合格させてください。今欲しいあれを今すぐに下さい。今ある問題を奇跡でも何でもいいから使って、解決して下さい。今、この悔しいへし折られたプライドを立てさせてください。今、僕の私の正しいことを証明して下さい。それでこそ、永遠のいのちや罪の赦しや神の国に入れられるということに意味があるんじゃないですか？」と、与えられた限りない豊かなキリストにある恵みの価値を全く分かっていないかのような呻きを、態度を、ややもすると取ってしまいます。

まあ、取ってもいいんです。

こういうことを思ったり、口にしたりしてはいけないということを今言おうとしているのではなく、思う存分思っただけで下さる、神様にぶつけて下さって良いと思います。

だって私たちは、前回見ましたようにキリストにあつて大胆に神に近づくことが出来る身分なんですから。

ただし、ぶつけて、ただそこで終わってはいけません。

その先にある、深い深い神からの語り掛けと悟らせて頂く気付きがあることを忘れないでいたいと思うんです。

Part Five

使徒パウロは、実際に今牢獄に繋がりに、やがて首をちょん切られて死んでしまいます。

でもパウロは、そのような中でもこんなことを口にします。

パウロの祈りの言葉の一つ前の節です。

エペソ人への手紙 3 : 13 (パウロ)

パウロだって人間ですから、さっき言ったようなことを心に抱いたかもしれません。

でも、結局その口をついてできた言葉は、「栄光」です。

「落胆なんかする必要はない」という言葉です。

彼は決して、キリストにあつて与えられた限りない豊かな恵みを、たかだか朽ち果てていくことが決まっている限りあるこの肉体の命と引き換えるような、朽ち果てていく肉体ほどにしか価値を見出せないという霊的盲目には陥りませんでした。

バプテスマのヨハネもそうです。

正当な訴えを不当に棄却されて、時の権力者の手によって首をちょん切られて死んでしまいますが、そんなバプテスマのヨハネについてイエス様が仰った言葉が、まことの価値とまことの価値ではないものを見分ける生き方を確かにバプテスマのヨハネは生きたということを、明かしていただきます。

マタイの福音書 11 : 11 (パウロ)

人類史上女性の体から生まれてきた者の中で、誰が一番偉大な人かご存知でしょうか？

バプテスマのヨハネです。

エジプトのファラオでもなく、ギリシャのアレキサンダー大王でもなく、歴代のローマ皇帝でもなく、徳川家康でもなく、アインシュタインでもなく、ビル・ゲイツでも、スティーブ・ジョブスでも、イーロン・マスクでも、本田宗一郎でもなく、人類史上もっとも偉大な人は、バプテスマのヨハネです。

イエス様から見て、神の目から見て、キリスト信仰による正当な訴えを不当に棄却されて、首をちょん切られて、若くして亡くなったバプテスマのヨハネこそ、人類史上最も偉大な人です。

そして、そのバプテスマのヨハネよりも偉大な者は、キリストにあって与えられた限りない豊かな恵みの価値を、他の何ものとも取り替えることもなく、すげ替えることもなく、最後の最後まで、その底知れぬ価値を知り続けることを目的に与えられた人生を生き抜き、遂に、神の国に入った者たちの中でも最も小さき者たちです。

ですが、「この最も偉大なことに至る道程を全力で妨げる者たちがおり、その者たちによって大いなる攻撃を受け、その攻撃に屈してしまう者たちが少なからずいる」と、イエス様仰います。（もう一度 11 節から）

マタイの福音書 11 : 11 - 15 (パウロ)

「耳のある者は聞きなさい。」

「バプテスマのヨハネの生き方こそ、キリスト者の生き方だ」と、「耳のある者たちは聞きなさい」と、イエス様仰います。

だから、使徒パウロは祈るんです。

膝をかがめて祈るんです。

祈らずにはられないんです。

キリスト・イエスにあつて与えられた限りなく豊かな恵みの価値が分かるようにと、益々分かるようにと、どんどん分かるようにと、断然分かるようにと祈るんです。

「内なる人が御霊によって強められますように！ 心のうちにキリストを住まわせてくださいますように！ その広さ、長さ、高さ、深さがどれほどであるかを理解する力が与えられますように！ 人知をはるかに超えたキリストの愛を知ることが出来ますように！ 神の満ちあふれる豊かさにまで、あなた方が満たされますように！」と祈るんです。

キリスト・イエスゆえに囚人となっていることが全くもって、キリストにある限りない豊かな恵みが揺るがされることもなく、むしろ、こういう状況にあつてこそ浮き彫りになる恵みの豊かさを、聖霊のわざによって実感させられているパウロが祈るんです。

暗闇の中で、孤独の中で、八方塞がりの中でこそ、光り輝くまことの光として、本当の恵みを、与えられている恵みの本質を実感しているパウロが祈るんです。

決して、神が与えて下さるすべての最上の霊的祝福を、高々体が束縛されていることや思い通りに事が運んでいないように思えてしまうことや囚人だと見下されてプライドが傷つく程度の価値に引き下げたり、置き換えたり、すげ替えたりなんかせず、

まだまだ知り尽くすことも、理解することも、到底出来ないほどの父なる神がキリスト・イエスを通して与えたもうた限りない祝福を知り続けることが出来るようにと祈るんです。

こんな祈りが、私たちの口を突いて出てくることを望まずにはられませんし、このパウロの祈りが私たちの身に起こることを望みながら、さらにまた祈っていきたくて願います。

こういう祈りが、私たちの祈りとなることを期待せずにはられません。

来週からも続けて、このパウロの祈りを何回かに渡って見ていきたいと思っております。

乞うご期待！

お祈りいたします。

祝祷：こういうわけで、私は膝をかがめて、御父の前に祈ります。